

「棟梁」技を伝え、人を育てる

小川三夫 著（聞き書き 塩野米松）

小川三夫氏は、法隆寺の宮大工・故西岡常一棟梁の唯一の内弟子。高校の修学旅行で法隆寺を見て感動して宮大工を志し、21歳で西岡棟梁に弟子入りした。昔の徒弟制度に比べれば年齢的には遅い弟子入りである。その後、伝統の技を継承するため「鶴工舎（いかるがこうしゃ）」を設立し、数々の寺社建築を手がけながら宮大工の育成をしてきた人である。2003年に現代の名工に選出された。

本書は、「はじめに」と「あとがき」以外は、塩野氏の聞き書きの形式、なおかつ小川氏の思いを忠実に伝えるために方言混じりの口調そのままに書かれており、その思いと人柄が直に感じられる。その内容には「宮大工の修行は、理論・理屈、技術・技能だけではなく、寝食とともに生活しながら、一心不乱に打ち込まなければならない。言葉で技や感覚を伝えることは不可能。学校では先生が教科書や黒板を駆使して教えてくれる。子どもたちは教わることが当たり前だと思っていて、教われればわかると思っている。（中略）点数を取るためには近道があり早道があり要領がある。このような方法で慣れた子どもに技を教え、感覚を身に付けさせることは無理。技も感覚も大工の考え方も本人が身に付けるもの、体に記憶させ体で考えること。技を身に付けるのに早道も近道も裏道もない。技を手に入れる、感覚を身に付ける、それは遅々として進まない道だが、ある時にぐいと階段を上がる。その階段を上がる時一つ上の何かをつかみ取る。それが自信になる。」と述べられている。また「育てることは難しいが、環境と機会を用意すれば、学びたい者はその中で自然

に育っていく。修業は、刃物研ぎからすべてが始まる。切れない刃物では良い仕事はできない」と言う。何も考えずにただ無心に刃を研ぎ上げると言うことは感性を研ぎ澄まし、技を磨くことに通じるのである。

さらに、次の世代への引継ぎの仕方と自分自身の身の引き方についても興味深い。自分が棟梁を辞さなければ後継者は育たないとの考え、60歳を期に「鶴工舎」を弟子に引継いだ。「任せる時期が遅かったら人は腐る。人に任せ人に譲ることで伝統の技を生きたものとして伝えていけ」と言う。また、小川氏は、「棟梁として上に立つ者の大事なことは忍耐、これがなかったら人の上には立てない。」とも言う。西岡棟梁が薬師寺の仕事で大勢の職人を見なければならなくなり、自分は道具を置き、仕事を任せた。自分でやったら上手にできるにもかかわらず、下手な仕事にも「ありがとう。がんばってくれ」と労いの言葉をかけた西岡棟梁の姿勢がそれを物語る。

木造建築は、技術が発達して電動工具の利用やプレカット工法などで効率的に行われるようになった。工業技術は、数値化された理論に基づいているし、IT、AI、IoTが産業をけん引する時代になりつつある。学校教育では学習指導要領の改善の方向性として「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点）が示され、教育の質の向上に向けて組織的・計画的・効率的な取組が求められている。本書で語られる人材育成の方法は、一見このような技術や教育の方向と真逆のように感じるかもしれない。しかし、人を育てるという目的は同じである。引退を期に語られた小川氏の言葉は、宮大工を育成することを通して人が育つ上で最も大切なことは何なのかを示唆している。

（文春文庫、230頁 571円＋税）（山田勝彦）